

ベンガル語と日本語に見られる  
自然（火・光・水・風・土）に関する非反復形オノマトペ<sup>1</sup>の比較研究

Sudip Singha

キーワード：ベンガル語、日本語、非反復形オノマトペ、名詞、動詞

要旨

ベンガル語における自然（火・光・水・風・土）に関する非反復形オノマトペは-dani<sup>2</sup>、-kari、-a、-c̣i と融合して名詞化される。場合によって、オノマトペ語基が形態は不変で名詞としての機能を果たす。日本語の場合、オノマトペ語基は動詞や名詞などの要素に伴って複合名詞として使用される。ベンガル語の非反復形オノマトペには、日本語と異なり、形容（動）詞としての用法が観察されない。動詞用法では、ベンガル語と日本語のオノマトペには両方とも「する動詞（ベンガル語では kora）」を要素として用いて動詞として用いるのが特徴的である。また、非反復形オノマトペの副詞用法では、ベンガル語のオノマトペは kora（＝する）動詞の不定詞形 kore を用いるのに対して、日本語の非反復形オノマトペは引用助詞の「と」をオノマトペ語基に伴うところが興味深い点である。

はじめに

何かの音・動作・様子・状態などを言語で表現したものをオノマトペという。日本語

---

<sup>1</sup>本論文上、オノマトペ、または非反復形オノマトペはタイトル通り火・光・風・水（液体）・土に関連するオノマトペのことを示す。ベンガル語のオノマトペの例は、Bandyopadhyay, H. (2011) *Banglīya Sabdakosh* (Bengali Lexicon). Calcutta, Sahitya Akademi、Chakravarty, B. (2007) *Uchchatarā Bangla Vyākaran* (Higher Bengali Grammar). Kolkata, Akshay Malancha. と Dakshi, A. (2001) *Bangla Dhvanmyatmak Shabda* (Bengali Onomatopoeias). Kolkata, Subarnarekha. を参考としている。

<sup>2</sup>本論文ではベンガル語文字転写方式は、Majumder, P. C. (6<sup>th</sup> Ed., 2019) *Bangla Bhasa Parikrama* (A Treatise on Bengali Language). (Vol. 1), Dey's Publishing, Kolkata, pp. XIX/192-193. に従っている。

及びベンガル語では形式的に広く 2 種類が見られる。次の(1)a、b.と(2)a、b.の例を見よう。

(1)

a. **ʈpʈp**<sup>3</sup> kore                                      pora  
       kora (=する) の不定詞形              落ちる  
       「**ぽつぽつ**落ちる」

b. **ʈp** kore    pora  
       kora (=する) の不定詞形              落ちる  
       「**ぽつり**と落ちる」

(2)

a. 雨が**ぽつぽつ**降り始めた。

b. 雨粒が {**ぽつり**と/**ぽつと**} 顔にあたった。

上の(1)a、と(2)a.に見られるように、同じ語基が次々に繰り返して構成されるオノマトペは本稿では反復形オノマトペまたは、重複形オノマトペと呼ぶ。また、(1)b.と(2)b.のように語基が単独で用いられている場合は非反復形オノマトペとする。

オノマトペは両言語において、文脈中で用いられる際、他の形態要素、あるいは品詞を伴い名詞・複合名詞、形容詞・形容動詞、動詞や副詞として使用される。本研究では五大元素(空・風・火・水・地)を基にして火・光・風・水(液体)・土それぞれの要素に対してベンガル語と日本語において用いられる非反復形オノマトペを研究対象とし、非反復形オノマトペには統語・形態的にどのような特徴が観察されるかを明らかにする。

## 1. ベンガル語

本節ではベンガル語に見られる「火・光・風・水(液体)・土」に関する非反復形オノマトペが文脈中どのような品詞的範疇ごとにおいてどのような用法で用いられるかについて検討する。

### 1.1 名詞用法

ベンガル語における自然に関する非反復形のオノマトペには、オノマトペ語基形態がそのまま単独名詞になる例、ないしはオノマトペ語基と接尾辞を付加しオノマトペ語基が表す意味に関連する意味を表す名詞になる例が観察される。下記の例を見よう。

(3)

a. **tar**                      j3amay      **pik**                      lege    aɟhe  
       彼の                      服に                      唾が                      付いている  
       「彼の服に唾が付いている」

a'. **pik**                      kore    phela  
       動詞 kora (=する) の不定詞形                      落とす  
       「**pik**と音をたてて落とす」

<sup>3</sup>用例の中の太字になっているものはオノマトペ、またはオノマトペ語基を示す。

b. rastar paʃe maʃi jɔme dʒhip høye aʃhe  
 道の そばに 土が 溜まって マウンド になっている  
 「道のそばに土が溜まってマウンドになっている」

b'. dʒhip kore maʃite pɔra  
 地面に 落ちる  
 「dʒhip と音を立てて地面に落ちる」

c. borsakale pahari dhos name  
 雨の時期に 山に 土砂崩れが 起きる  
 「雨の時期に山に土砂崩れが起きる」

c'. dhos kore pɔra  
 落ちる  
 「dhos と音をたてて土砂崩れが起きる」

d. ek dhok jɔl  
 いち (数) 一口 (gulp) 水  
 「一口の水」

d'. dhok kore gela  
 飲み込む  
 「がぶっ・ぐいと飲む」

注目すべき点として、(3)d.では他の用例と違って母音が変わることが観察される。オノマトペ **dhok** の母音-ɔ が -o に変わり dhok という名詞に派生している。

(4)

a. pik -dani  
 「壺」という意味を加える接尾辞  
 「たん壺」

a'. →(3)a'.を参照

b. picʃ -kari  
 接尾辞  
 「シリンジポンプ」

b'. picʃ kore phela  
 落とす  
 「ぺつとつば・唾液を飛ばす」

c. (i) cʃhæk -a (cʃhēka とも発音される)  
 接尾辞  
 「飛沫・しぶき」

c. (i)'. **ɕhãk** kora  
 飛沫=しぶき・ひまつ する

「**ɕhãk** という音をたてる」

c. (ii) **ɕhãk** -ɕi  
接尾辞

「カレーの一種」

c. (ii)'. 「オノマトペとしての用例については上記の c. (i)'. を参照」

d. **dip**

$d+\alpha+p \rightarrow d+i+p$

「灯り」

d'. **dɔp** kore jɔbɔla  
輝く

「**dɔp** と音たてて灯りが輝く」

上記の(3)の例に見られるように、オノマトペ語基の **pik**、**ɔhip**、**dhɔs** いずれもが形態は不変で名詞の機能を果たしている。(3)d. と d'. の用例ではオノマトペ語基 **ɔhɔk** に母音-ɔ の代わりに-o が挿入され名詞としての機能を加えている。いずれのオノマトペ語基も擬音語として用いられるのに加え、(3)の用例で見られるように場合によってオノマトペ語基が形態の変更を起こさずそのまま名詞として機能を果たす用法が見られることもあれば、場合によって母音が変わることによって名詞の働きをこなすのが観察されることもあるのである。

一方、(4)の例ではオノマトペ語基の **pik** は接尾辞-dani<sup>4</sup>、**picf** は接尾辞-kari<sup>5</sup>、**ɕhãk** は接尾辞-a<sup>6</sup>、接尾辞-ɕi<sup>7</sup> と融合して名詞になっている。(4)d. の **dip** という名詞もオノマトペ語基の **dɔp** からの派生化名詞として考えられる。

## 1.2 形容詞用法

興味深いことに、ベンガル語における非反復形のオノマトペに形容詞としての用法は見られない。

## 1.3 動詞用法

一般的にベンガル語の非反復形のオノマトペには、動詞 **kora** (=する) を伴って動詞化する方法と、オノマトペ語基に複合動詞化を導く動詞を組み合わせる複合動詞として用いられる例が観察される。

<sup>4</sup> Chatterjee (1926 part-II pp.708) はこの接尾辞を「diminutive affix」と指摘している。

<sup>5</sup> Trivedi (1917-1918 pp.19) はこれを名詞を形成する接尾辞と指摘している。

<sup>6</sup> Chatterjee (1926 part-II pp.658-660) はこれを接続詞・受動分詞・動詞名詞 (definitive connective passive participle and verbal noun) を形成する接尾辞として指摘している。

<sup>7</sup> Chatterjee (1926 part-II pp.708) はこの接尾辞を「receptacle」の意味を加えるものとして指摘している。

〔オノマトペ+動詞 *kora* (=する) 〕

(5)

a. *cf̥ō*      *kora*

する

「じゅわつと音がする（砂などに液体が浸透する時）」

b. *cfhɔp*      *kora*

する

「ぼとんと音がする（物体が液体・水に落ちる時）」

c. *cfhæ̃k*      *kora*

する

「しぶきの音がする（温かい鍋などに油・水などを注ぐ時）〔ぱちぱち・びちびち〕」

d. *jʒhɔp*      *kora*

する

「どぼんと音がする（物体が液体・水に落ちる時）」

e. *bhus*      *kora*

する

「*bhus* と音がする（開いているところから空気が一気に漏れ出る時）」

f. *qhip*      *kora*

する

「どすんと音がする（物体が地面に落ちる時）」

上記の例に観察されるように、オノマトペ語基が動詞の *kora* を伴って動詞化されているのが分かる。いずれの場合も音響に関連するオノマトペであり、一般動詞のように感じられる。音と関連しない状態ないしは様子（例えば、火・光に関するオノマトペ）を示すものの場合、文法的に相応しくても一般動詞のような感覚が少し低い。また、動作が行われる流れ、または時間が一時的な場合上記の「オノマトペ+動詞 *kora*」は特に一般動詞のように感じられる。

〔複合動詞〕

(6)

a. *cfhɔp*      *kore*

動詞 *kora* (=する) の不定詞形

*oʃa*

起きる

「物体が液体・水に落ちる時 *cfhɔp* と音がする」

b. *cfhɔlat*      *kore*

*oʃa*

起きる

「物体が液体・水に落ちる時 *cfhɔlat* と音がする」



[オノマトペ+動詞 *kora* (=する) の不定詞形 *kore*+動詞]

(8)

- a. *çfō* *kore* *pan kora*  
動詞 *kora* (=する) の不定詞形 飲む  
「ちゅっ・くいつと飲む」
- b. *çhapat* *kore* *pōra*  
落ちる  
「ぱしゃつと音たてて水面へ落ちる」
- c. *jɔhəp* *kore* *jole* *pōra*  
水面へ 落ちる  
「じゃぼん・どぼん・どぼんと水面へ落ちる」
- d. *təp* *kore* *pōra*  
落ちる  
「ぼつり・ぼとり・ぼとんと水面に落ちる」
- e. *təpas* *kore* *pōra* (同上、d.より厚い滴)
- f. *təp* *kore* *pōra* (同上、d.より少なめの滴)
- g. *ḍhək* *kore* *gela*  
飲み込む  
「がぶっ・ぐいつと飲む」
- h. *pik* *kore* *phela*  
落とす  
「ぺつとつば・唾液を飛ばす」
- i. *bhus* *kore* *bhese oṭha*  
浮かぶ  
「ごぼつと音をたてて水面から急に現れる」
- j. *phus* *kore* *berono*  
抜ける・出る  
「すーつと空気が抜ける」
- k. *sō* *kore* *bōwa*  
吹く  
「さーつと吹き抜ける」
- l. *ḍhip* *kore* *maṭite* *pōra*  
地面に 落ちる  
「ḍhip と音を立てて地面に落ちる」

m. dhəs kore dhose pora  
崩れる

「dhəs と音をたてて崩れる」

上述の(8)の例に観察されるように、オノマトペ語基が動詞 *kora* (=する) の不定詞形 *kore* を伴ってその次に位置する動詞（場合によっては複合動詞）を修飾している。Chatterjee (1926) は動詞 *kora* (=する) の不定詞形 *kore* が必ずオノマトペ語基の後ろに共起することからこの *kore* を不変化詞と指摘している。

### 1.5 考察

以上の検討から、ベンガル語における「火・光・風・水・土」に関連する非反復形のオノマトペは統語的に名詞、動詞、副詞としての機能を果たすということが分かる。名詞用法では、オノマトペ語基が音韻形態不変でそのまま単独名詞として機能を果たす用例が観察される。また、非反復形のオノマトペ語基に接尾辞要素 *-dani*、*-kari*、*-c̣i* などが結合して単独名詞化する使用法が見られ、場合によって、(4)c.のように接尾辞 *-a* が語尾に付加されて単独名詞に派して例も見られる。また、特筆すべき点としては、ベンガル語における非反復形のオノマトペには形容詞としての使用は観察されない。ベンガル語の非反復オノマトペは動詞「*kora*=する」を伴って動詞として用いられる。単独動詞「*oṭha*」と組み合わせる動詞化できる用法も少数であるが観察される。場合によっては、動詞 *kora* が連用体に変化し、動詞「*nama*」を用いて複合動詞として使用される場合もある。語基に接尾辞 *-ano* が融合して、単独動詞に派生していると考えられる例もわずかに存在している。もう一つの用法は副詞用法である。動詞 *kora* (=する) の不定詞形「*kore*」を伴って次に来る動詞を修飾する。上に述べたように、ベンガル語非反復形オノマトペは統語的に形容詞用法を除いた、名詞、動詞、副詞用法として用いられる。一般性と生産性が高いものとしては、副詞用法と動詞用法が挙げられる。また、名詞用法はあまり使用されない。

## 2. 日本語

本節では日本語に見られる「火・光・風・水（液体）・土」に関する非反復形オノマトペが文脈中どのような品詞的範疇ごとにおいてどのような用法で用いられるかについて検討する。

### 2.1 名詞用法

日本語における非反復形のオノマトペには、下記のような名詞としての使用法が見られる。

#### 〔オノマトペ語基+動詞〕

筧・田守(1993)は日本語におけるオノマトペの名詞用法について、いくつかの方法を指摘する際、単独名詞と組み合わせられ複合名詞化して用いられる例を挙げている。そのほとんどが反復形のオノマトペが関係したものであり、非反復形のは動詞の連用形と組み合わせる複合名詞化して使用される例が見られる。以下の例を見よう。



(9)

雨でびしょ濡れになる。（広辞苑第六版）〔（形容詞用法）→びしょ濡れだった。〕

〔名詞と組み合わせた複合名詞〕

(10)

- a. そよ風（広辞苑第六版）
- b. 汗びっしょりになる。（同上）

(9)の例が示しているように、オノマトペ語基は変化せず、それに伴う動詞が連用形に変化を起こして複合名詞化されているのが分かる。最後の(10)の例においてオノマトペ語基は名詞を伴い複合名詞になっている。(10)b.の用例は複合名詞の他に、形容動詞とみなす学者もいる。

## 2.2 形容詞用法

日本語における非反復形のオノマトペには、典型的な形容詞、つまり、語尾に「～い・～な」のあるもの、ないしはオノマトペ語基をこれらに導く用例が少数だが存在する。筧・田守(1993)はその数が少なく、一般的性質があまり感じられないと述べている。

浜野(2014、pp.120-122)は「だ・の・な・に」などの要素を使って形容動詞化される用法について指摘している。浜野(2014、pp.120-122)によると、この用法は形態的には、重複形、及び、接中辞の「ッ・ン」、及び、接尾辞「リ」のついたものに限られる。下記はいくつかの例である。

(11)

- a. きんきらきんの化粧（小野 2007）
- b. だらりの瞬間（汗）

上記の用法以外にも日本語におけるオノマトペは「こってり・あっさりした汁」、「とろっとしたプリン」、「ざらっとした紙」などの例があり、日本語の典型的形容詞と似たような形を持たなくても後ろに位置する名詞を修飾しながら形容詞として機能する。

## 2.3 動詞用法

〔オノマトペ+する〕

日本語のオノマトペに見られるもう一つの統語的使用法は、動詞としての使用法である。上述の2用法よりも更に一般的な用法としてとらえられ、オノマトペ語基は動詞「～する」と組み合わせて動詞化できるという特徴を持つ。筧・田守(1993)は、オノマトペ語基が「促音」、「撥音」のいずれかを含むもの、または、語尾に「リ」が付いている場合は動詞「～する」を伴い動詞化すると指摘している。浜野(2014、pp.120-122)は、「と」を含むもの、重複形と接中辞「ッ・ン」を含んだ「リ形」の3種類の「する動詞」を派生するオノマトペを指摘している。浜野(2014)が取り上げた例を見ると、オノマトペ語基に「促音」、「撥音」、「リ」のいずれかを含むものに引用助詞「と」が融合する傾向が見られる。以下の(12)に非反復形オノマトペ語基から動詞化される数例をあげる。

(12)

- a. かつかする
- b. ほこつとする
- c. とろつとする
- d. べつとりする

上記の例を見ると、前述した統語的用法よりも更に一般的かつ生産的であるのが明らかである。筧・田守(1993)は音に関連する少数のオノマトペを除いて、状態・様子を表す全てのオノマトペは上述の方法に従って動詞化するのが可能であると指摘している。注目すべき点は、「～する」を伴い動詞化できるオノマトペのいずれもが「～している」、「～した(名詞)」どれかの形にも変換して使用可能ということである(西尾 1988)。Kageyama(2007)のオノマトペから派生する「する動詞」に関して「深く理解されていない領域である」という指摘に言及した上で、浜野(2014, pp.120-122)はオノマトペの動詞用法「する動詞」にある「する」を普通の動詞「する」と異なり「オノマトペと離すことができない」と述べている。

#### 〔オノマトペ語基(要素) + 動詞化を導く要素〕

日本語のオノマトペ語基には動詞語基と関連づけられるものが数多く観察される。筧・田守(1993)、浜野(2014)はオノマトペ語基に動詞化を導く要素「～つく・めく・ける・る・かす・む・だつ(たつ)・ぐ」を付加してオノマトペを動詞化する例を紹介している。興味深いことに、非反復形のオノマトペから派生して動詞化できるものは反復形のオノマトペと比べると少数であり、下記の(11)の例に限られる。注意すべき点として、「～つく・めく・ける・る・かす・む・だつ(たつ)・ぐ」などの要素は非反復形オノマトペ語基以外にも反復形オノマトペの場合も語形成する例が観察される。その例として、筧・田守(1993)、浜野(2014)が指摘しているように、「ばさばさ」、「ねばねば」、「きらきら」、「はたはた」などの反復形オノマトペ語基から派生する動詞「ばさつく」、「ねばつく」、「きらめく」、「はためく」が挙げられる。注目すべき点に、日本語において「春めく」で見られるように普通名詞を動詞化する用例もある。

(13)

- a. そよぐ(そよと・そより) (浜野 2014)
- b. たらす・たれる(たらつと) (同上)
- c. だれる・だらける(だらつと) (同上)
- d. と(ろ)かす・と(ろ)ける(とろつと) (同上)
- e. 吸う(すーっ) (同上)
- f. 吹く(ふー) (同上)

上述の例が示しているように、非反復形のオノマトペ語基(要素)が動詞化を導く要素を伴い派生動詞化されている。

## 2.4 副詞用法

日本語におけるオノマトペの最も典型的な使用方法としては、副詞用法が挙げられる。まず、次の例文を見よう。

(14)

- a. かつと晴れる
- b. からっと晴れわたる
- c. きらりと光る
- d. たらりと流れる
- e. そよとも動かない空気
- f. そよりと夕風を受ける
- g. ふーっと吹く
- h. 波がびしゃっと降りかかった
- i. ぼたりとこぼす
- j. ぼとりと落ちる
- k. ぼとんと落とす
- l. しっとり濡れている
- m. だらっとこぼれた
- n. しとつと濡れる
- o. びっしょりと濡れる
- p. (雨で) びっしょりになる
- q. じゃりつと砂をかむ
- r. じんわりと汗ばむ
- s. べちよつと塗った

上記の例に観察されるように、自然界の火・光・風・水・土に関する非反復形のオノマトペの副詞用法では頻繁に引用助詞「～と」を伴うほか、場合によっては、助詞「～に」を伴って副詞として機能を果たして後ろにつく動詞を修飾する用例が見られる。

## 2.5 考察

日本語に見られる「火・光・風・水・土」に関連する非反復形オノマトペの統語的用法には、名詞（複合名詞）・形容詞（形容動詞）・動詞・副詞としての用法が観察される。名詞用法に関しては、オノマトペ語基に音韻形態変更を起こした動詞を付加した上で複合名詞として用いられる方法が挙げられる。特筆すべき点としては、日本語の非反復形オノマトペには単独名詞として使用される用例が存在しないという点が挙げられる。更に、日本語における非反復形オノマトペの形容詞用法では、オノマトペ語基が日本語の典型的形容詞、つまり、語尾に要素として「～い」が現れるものに変化したものはごくわずかである。また、オノマトペ語基が「だ・な・に・の」などの形容動詞化を導く要素と組み合わせられ、形容動詞化する用法も特徴的である。文の中で使用可能な他の統語的用法として

は、動詞としての使用が挙げられる。日本語に見られる非反復形のオノマトペには2つの方法が観察される：動詞「～する」を伴い動詞化するものと「～かす・～ぐ・～す・～ける」などの日本語の典型的動詞化を導く要素と結合して一般動詞に変化できるものの2つである。日本語における非反復形オノマトペに見られるもう一つの統語的用法は、副詞としての用法である。ごくわずかな例外を除き、引用助詞「～と」を語尾に伴い後に続く動詞を修飾する。以上のように、多様な統語的使用の例が観察されるが、その中でも特に副詞としての使用、動詞としての使用が多く見られる。

## 2.6 比較考察

本節ではベンガル語と日本語の両言語に見られる、「火・光・風・水・土」に関連する非反復形オノマトペが統語・形態的用法上どんな特徴を持っているか、反復形オノマトペの現象にも言及しながら比較考察したい。両言語の非反復形オノマトペは、文中で用いられる際、接尾辞・接中辞や他の補足要素を伴って使用されていることが特徴的に類似する点である。以下は品詞的範疇ごとにおいて観察される特徴を見よう。

両言語においても非反復形オノマトペの名詞用法が見られるが、ベンガル語において単独名詞として用いられるのに対して日本語の場合そのような特徴はない。一方、日本語に観察される複合名詞化して用いる例はベンガル語において見られない。注意すべき点として、日本語では「ざんざ降り」、「そよ風」などで見られるように、オノマトペ語基と動詞連用形・名詞が結合して複合名詞化する用法が観察される。同様な用法はベンガル語において、反復形オノマトペと名詞の組み合わせる場合にのみ観察される。例えば、**cʃhələcʃhəl** akhi 「泣きそうな目」、**j3həmj3həm** bristi 「どしゃ降りの雨」、**j3hurj3hur** səmiron 「そよ風」などがその例である。以下はこれら反復形オノマトペの副詞用法の用例である。

(15)

- a. **nadir** j3əl **cʃhələcʃhəl** kərə bəoiçʃhe  
 川の 水が 流れている  
 「川の水が **cʃhələcʃhəl** と (音をたてて) 流れている」
- b. **j3həmj3həm** kərə bristi neme elo  
 雨が 降り始めた  
 「どしゃ降りの雨が降り始めた」
- c. **j3hurj3hur** kərə batas bəoiçʃhe  
 風が 吹いている  
 「風が**そよそよ**吹いている」

興味深いことに、日本語の方でも「きらきら星」または、「びしょびしょ頭」のように反復形オノマトペの場合、全く同じような使い方が存在している。ベンガル語の場合、

非反復形オノマトペと異なり、接尾辞-i<sup>9</sup>（例えば、**ɕʃɔkmək** + **-i** = **ɕʃɔkməki** 「きらきら輝き・火打ち石」）、接尾辞-ani<sup>10</sup>（例えば、**kɔlkɔl** + **-ani** = **kɔlkɔlani** 「水が流れる時のせせらぎの音」）、接尾辞-ɔk<sup>11</sup>（例えば、**jʃhɔljʃhɔl** = **jʃhɔl** + **-ɔk** = **jʃhɔlək** 「きらめき」）がオノマトペまたは、オノマトペ語基に付加して名詞化する。他方、日本語の場合両方ともほとんど同じような（複合）名詞化する方法が観察される。とはいえ、非反復形オノマトペの名詞用法では様々な方法が観察されていても使用頻度の観点からは他の統語的用法より低いように感じられる。

形容（動）詞としての使用では、日本語の非反復形オノマトペが形容動詞として機能を果たす場合が見られるのに対して、ベンガル語の非反復形オノマトペは形容詞・形容動詞としては使用されない。しかしながら、ベンガル語の反復形オノマトペの場合、接尾辞-e<sup>12</sup>をオノマトペ語基に付加して形容詞として頻繁かつ典型的に用いられる。例えば、**phurphure batas** 「そよ風・そよそよ風」。それに対して、日本語においても反復形オノマトペには「べとべとだ」「びしょびしょだ」などのようにオノマトペの形容（動）詞としての用法が観察される。

ベンガル語と日本語においてオノマトペの形容詞用法ではもう一つの特徴的なところが観察される。次の表1を見よう。

表1 ベンガル語と日本語におけるオノマトペの形容詞用法

	ベンガル語	日本語
非反復形	—	べとつとした・べつとりの
反復形	オノマトペ+e	べとべとした・べとべとの

上の表から分かるように、ベンガル語と日本語のどちらにも反復形オノマトペ+「の」・eで形容詞を作ることができるが、非反復形においては日本語では形容詞を作ることができるがベンガル語ではできない。ベンガル語は反復形と非反復形で語形成の方法に違いが観察される。

非反復形オノマトペを動詞として用いる際、両言語とも「～する動詞」を伴ってオノマトペ語基を組み入れた動詞を形成できるのは特徴的である。更に、どちらも典型的動詞化を導く要素を融合して派生動詞に変換できる用例が観察される。両言語においても、同じ現象を非反復形オノマトペと反復形オノマトペのいずれで表現するかによって描写する意味または、その感覚性が微妙に異なって来るのが注目すべきところである。例えば、下の表2を見よう。

<sup>9</sup>Chatterjee (1926 part-II pp.671-674)はこの接尾辞を 名詞と形容詞を形成する接尾辞と述べている。

<sup>10</sup>Chatterjee (1926 part-II pp.665)はこの接尾辞を「vague diminutive force」の意味を加える接尾辞と指摘している。

<sup>11</sup>Chatterjee (1926 part-II pp.679)はこの接尾辞を動詞語基から名詞を派生する接尾辞と指摘している。

<sup>12</sup>Chatterjee (1926 part-II pp.675)はこの接尾辞を形容詞を形成する複合接尾辞と指摘している。

表2 ベンガル語と日本語におけるオノマトペの副詞用法

非反復形・反復形	ベンガル語	日本語
非反復形	ɕʃik kore jʒola	きらっと輝く
反復形	ɕʃikɕʃik kore jʒola	きらきら輝く
非反復形	dəp kore jʒola	ざらっと輝く
反復形	dəpdəp kore jʒola	ざらざら輝く
非反復形	ʈɔp kore pora	ぽつりと落ちる
反復形	ʈɔpʈɔp kore pora	ぽつぽつ落ちる

上の表2に見られるように、同じ現象をオノマトペ語基の非反復形で用いて表す際は瞬間的に行われる動作を示し、反復形オノマトペでは同じ動作の動き・流れが長期的な行いを描写していると理解できる。

副詞として機能する時、ベンガル語の非反復形オノマトペは必ず動詞 *kora* (=する) の不定詞形 *kore* を伴うのが極めて特徴的である。このように *kore* を要素として副詞として使用する用法は反復形オノマトペにも観察され、オノマトペ特有の傾向である。他方、日本語の非反復形オノマトペは副詞としての働きをこなす時、引用の助詞「と」をオノマトペ語基の後ろに取る場合が圧倒的に多く見られる。興味深いことに、オノマトペの副詞用法に関してベンガル語の動詞 *kora* (=する) の不定詞形 *kore* は、日本語における引用の助詞「と」と同じ働きをこなしているように見える。また、両言語において非反復形オノマトペの副詞としての使用が最も頻繁かつ典型的に見えるのに対して、反復形オノマトペの場合ベンガル語は特徴的に形容詞・動詞と副詞用法が最も典型的であり、日本語の場合動詞と副詞用法が最も頻繁に見られる現象であるという違いがある。

## 付録

ベンガル語はインド・ヨーロッパ語族のインド・アーリヤ語群に属する言語である。インドの西ベンガル・トリプラ・アッサム各州とバングラデシュにおいて話される。ベンガル語は屈折語 (Inflectional/Synthetic Language) であるものの膠着語 (Agglutinating Language) 的な性格が強いとされる。語順は SOV 型の言語であり、前置詞でなく後置詞を用いる。指示形容詞や冠詞は名詞の後に置かれるが、一般の形容詞類は前に置かれる。

## 参考文献

- Chatterjee, S. K. (1926) *The Origin and Development of the Bengali Language*, Calcutta University Press, Calcutta
- Kageyama, T. (2007) Explorations in the conceptual semantics of mimetic verbs. Frellesvig, B., M. Shibatani and C. J. Smith, *Current issues in the history and structures of Japanese*, Kuroasio. Tokyo, pp.27-82.
- Thakur, R. (1900-1901) *Shabda-Tattva, Bhasar Ingit* (Onomatopoeia, Linguistics), Rabindra Rachanabali, West Bengal Govt.

- 小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館  
笈寿雄・田守育啓(1993)『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房  
浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペー音象徴と構造ー』くろしお出版